「梅原日本学」問い、継ぐ

大胆な仮説による「梅原日本学」を築いた故・梅原猛さんの哲学を未来につなぐ。その一歩として、生誕100年を記念したフォーラム「これからの梅原猛」（京都新聞共催）が、梅原さんの誕生日である３月20日、京都市左京区の京都大稲盛財団記念館であった。従来の学問の枠にとらわれず、京都の地で歩んだ軌跡とは。そして、長い思索の果てに構想した西洋や東洋という地域に縛られない「人類哲学」は今、私たちに何を問い掛けるのか。３時間超に及んだゆかりの研究者たちによる議論を詳報する。 （樺山聡）

梅原猛 生誕100年記念フォーラム

◀梅原猛さんの写真を掲げ、あいさつする梅原記念財団代表理事の賢一郎さん（京都市左京区・京都大稲盛財団記念館）＝撮影・笠原良介

「人間中心主義を批判」

「本日、梅原猛が仙台で生まれて１世紀が過ぎたことになります。この日、梅原記念財団は、梅原猛とは何であったのかという問いとともに出発します」

フォーラム冒頭。猛さんの長男で京都芸術大名誉教授の賢一郎さんは語った。

「梅原猛は人間中心主義を批判しました。人間中心主義とは、人間を自然の支配者とする考え方です。子どもの頃、ドジョウすくいやセミ採りに明け暮れた猛は生涯、人間主義になじめませんでした。縄文、アイヌ、沖縄、アニミズムに関心を向け、東洋思想、特に大乗仏教に分け入りました。それも、人間中心主義に染まらない森羅万象のたたずまいを思い定めようとしたからにほかありません」

さらに座談会では、賢一郎さんが猛さんの人生と膨大な著書を振り返った。

その思想を受け継ぐため、賢一郎さんは自らが代表理事を務める梅原記念財団として今後も年次フォーラムを開催し、「梅原猛人類哲学賞」を創設することを表明。猛さんが暮らした東山の麓で対話を重ねていくことへの意欲を語った。

山折哲雄さん講演

怨霊史観、現代読み解く鍵

宗教学者の山折哲雄さん（93）が「梅原猛：その哲学と人生」と題して記念講演した。山折さんは、猛さんが創設に尽力して初代所長を務めた国際日本文化研究センター（日文研、西京区）で3代目所長を務めた。

「初めて先生にお目に掛かった時から、ほぼ半世紀の時間がたちます」と、出会いから語り始めた。

それは1970年、作家・三島由紀夫が陸上自衛隊市ケ谷駐屯地で自決して間もなくの頃だった。

東京の出版社に勤めていた山折さんは京都に出向き、猛さんの自宅を訪れた。ある出版企画の監修を依頼するためだった。

通された仕事場は8畳ほど。雑誌や写真集、絵画集などさまざまな本が見開いたまま並べられていた。

「そのちょうど真ん中に一人座って『ここに来い』と手招きして、あいさつも抜きに、その場でお考えになっていることを語り始められた。私は、ただただ聞くばかりでした」

それから猛さんが亡くなるまで親交は続いた。しかし、長い付き合いの中で、猛さんが書斎にいたり、原稿用紙に筆を走らせているところを見たことは一度もなかった。

「なぜだろう」。やがて、猛さんは口述筆記という手法を採用していると聞いた。「梅原さんという人は、考える、そして語る学を目指しているのかもしれない」。記述する哲学ではなく、語る哲学。「イエス、ブッダ、孔子。彼らは書いてはいない。いずれも弟子たちが文字にした。本来的に『語り』から出発した方。これは、だんだん梅原さんという人間を知る上で極めて重要なことだと思うようになりました」

さらに、ある一人の芸術家の苛烈な生き方が、猛さんを理解する上で鍵を握る。山折さんは、そう考えるようになった。

棟方志功。青森の貧しい家に生まれた版画家は「わだばゴッホになる」と告げて芸術への道に進んだ。

「それは『俺はゴッホのような芸術家になる』という意味ではなく、『俺はゴッホそのものになる』という決意だと思う」。海外で認められて名声を高めた志功は晩年、国内のそうそうたる陶芸家や画家たちを「西洋の模倣に過ぎない」と切って捨てた。そこに山折さんは猛さんに通じる部分を見いだす。

「京都に来て哲学を志したのは西田幾多郎に心酔していたからと言っておられたが、梅原さんは西田のような哲学者になろうとしたのではなく、『俺は西田幾多郎になる』という野心、あらがいの気持ちが最初からあったのではないか」

それは西田を乗り越えるということもあった。

「はじめから哲学、芸術、宗教、諸科学の区別を取り払っていた。すでにある専門家のどこかに入ろうとは毛頭思ってはいなかったに違いない。そういう覚悟のようなものが、柔らかで包容力のある人格の底にずっと流れていた」

猛さんが一躍脚光を浴びたのは、47歳で発表した著書「隠された十字架」（1972年）だった。

「主人公は聖徳太子。悲劇的な最期を遂げた帝王。天皇になることができなかった未完の王の死。その謎に挑み、法隆寺が聖徳太子の怨霊鎮魂の寺とする説を打ち出した。

『なぜ最初の大作が聖徳太子か』

当時、山折さんが抱いた疑問には理由があった。

『ほとんど史実という確たる証拠がない。そうそうたる古代史家や歴史家が実在性すら疑っている』からだ。ある時、本人にその理由を尋ねると、言下にこう答えたという。

『だからこそ選んだんだよ』

近代に至るまで太子にまつわる不気味な話が書物に残っていた。怨霊、生き霊、もののけ…。時代を深層において動かしているのは、そうした人間の怒り、恨み、悲しみ、慟哭であって、それが積み重なり、最大の史料として残っているにちがいない。考古学的、古文書的な断片で何が分かるのかと猛さんは言った。

『参りました』。その通りだと思いました。そしてだからこそ、『隠された十字架』は、どの分野にも属さない作品としてあらゆる方面から批判にさらされたが、大衆という読者の心を引きつけ、今も読み継がれている。怨霊史観の成立ですね」

それは、猛さんが最も影響を受けた哲学者の一人とも言えるニーチェが唱えた「ルサンチマン」という概念に通じる。日本語で言えば怨霊。ニーチェによれば、時代を動かす最大の要因は差別されたもの、虐げられたもの、弱きものたちの怨念、恨みである。それらが結集して社会的な勢力になった時、例えばフランス革命のように、世の中は変わる。

猛さんとニーチェ。東西の哲学者の共鳴は「いまだに有効」と山折さんはみる。「この思考の鋭さは、ウクライナやパレスチナの戦争など現在の世界情勢をひもとく上でも欠かせない重要な意味を持っている」

ただ、怨霊史観とルサンチマンには違いもあると強調した。「ニーチェは憎悪の哲学。しかし、梅原さんの怨霊史観に暗さはない。明るい。そこには鎮魂の思想がある」

古代史の謎に果敢に挑んだ猛さんは、最澄、空海、法然、親鸞、道元、日蓮といった平安時代から鎌倉にかけての仏教の英傑たちの研究に没頭することで、西洋では乗り越えがたい思想を追い求めていく。

「この梅原思想の核をどう受け継いでいくか。後進に託されている」

山折さんは以前、ある研究会で空撮した日本列島を見た経験を語った。3千㍍上空から見えたのは海と森。やがて高度を下げると水田が広がる。「海洋、森林国家を縄文文化の象徴とみれば弥生文化が現れてきた」。そしてさらに地表に近づくと工場群。近代国家が顔をのぞかせた。

「列島は3層構造で出来上がっている。こんな国は日本以外にあるだろうか」

日本列島の3層構造はどういう意味を持つのか。「古い時代の層を克服し、否定・排除して新しい層の時代に進化・発展していくという意識構造になっていないことが分かる。最底辺に深く広がっているのが縄文文化。そのことを早くから研究されていたのが梅原さんでした。基層にある縄文文化を見つめることで、どのように世界の現状に根本的な批判を加えようとしたのか。そのことは後の講演者に譲りたいと思います」

うめはら・たけし（1925～2019年） 宮城県仙台市生まれ。愛知県で育ち、京都大へ入学。42歳で初の著作「地獄の思想」を刊行。「隠された十字架 法隆寺論」と「水底の歌」、「出雲と古代権力の関係を探った「神々の流竄（るざん）」の古代３部作は反響を呼んだ。立命館大教授、京都市立芸術大教授を経て74年に同大学学長に就任。大学移転に力を注いだ。日本ペンクラブ会長を務め、「九条の会」の呼び掛け人になった。脳死やクローンなど生命倫理に関する著述も多かった。晩年、西洋も東洋も超えた「人類のための哲学」を構想し、その序論として2013年に「人類哲学序説」（岩波新書）を刊行して逝った。

やまおり・てつお 1931年米サンフランシスコ生まれ。岩手県花巻市で育つ。東北大大学院文学研究科博士課程修了。国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター所長などを歴任。著書に「愛欲の精神史」「日本文明とは何か―パクス・ヤポニカの可能性―」「アッダは何子を捨てたか」「「歌」の精神史」など。

時代動かすのは、怒り・恨み・悲しみ・慟哭…その積み重ねが史料

日文研の自由さ守る

井上所長あいさつ

猛さんが創設に尽力した日文研の井上章一所長＝写真＝があいさつした。「先生と最初に出会ったのは設立の時。当時、人文諸学の学界は設立に強い抵抗感を示しました」と振り返った。「日本を力強く世界にアピールするとんでもない民族主義の研究所ができる。きっと梅原思想を世界にまき散らすための研究機関に違いない。あんなところに研究の自由はない。いくつもの学界がそう声明を発表しました」

井上さんは日文研創設時から所員となった。「その後、日文研ができることに思想的な危うさをみた諸学会の人たちの中で、私の気ままな研究に苦言を呈する人も出てきました。『あんな自由奔放な研究を許していいのか』と。日文研に自由はありえないと言い切った人たちが、そんな非難をするようになっていた」

しかし初代所長を務めた猛さんは何も言わなかった。「先生は私のことをきっと危なっかしく御覧になっていたと思うのですが、ただの一度も『改めたまえ』というような苦言をおっしゃらなかった。そのような自由が担保されている日文研という組織を、私は壊してはいけないと心の底から思っています」

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます